

あとがき

そのつもりで仕組んだわけではないのに、あとがきを六月二十九日に書く段取りになったことに、何か因縁のようなものを感じます。

昭和二十年のこの日の早暁、岡山市は米軍機七〇機の空襲を受けて死者一七三七名、焼失家屋六千戸の被害を受けました。当時九歳の私はこの日全焼した市域の真ん中、内山下で被災し、逃げ惑った挙句に岡山神社裏の旭川の川辺で救われました。以来、私は自分の「幼年期の終わり」がこの日であったという強い自覚があります。この長かった一日で見聞きしたことは、それまでの短い生涯での、総ての見聞と経験に数倍する強烈なものでありました。必死に駆ける私の十メートル前に炸裂した焼夷弾を、その時は怖いとは思いませんでしたが、もし私がほんの数秒、数歩早く駆けていたならば、私は跡形もなく燃えて、今日の私は存在しません。私が存在しなければ、それ以後の六十年間に私が原因で発生し、そして消えていった事象の総てが始めから無かったこととなります。この認識が私の自我の自覚めを揺り起したのでしょうか、その後も生死を分ける偶然を何度か経験しましたが、自分の原点はこの日の被災体験にあるという想いが常にあって今日に至りました。

そういうわけで私にとって初めての(そして多分最後の)エッセイ集の巻頭は、六十年前の古臭い話ではありますが、どうしても「烏城炎上」でなければなりません。この(小説のようなもの)を一九八二年に発表したときのタイトルは、「またたちかえる城の下」で、私はこの方が気に入っていますが、改題の理由は省きます。

古希を目前にして、これを好機に二十年このかた書き散らしたものをまとめておきたいと思いついたのが昨年夏のこと、ほぼ一年整理に努めた結果がこの一冊になりました。各篇もとより文体怪しく内容貧寒のそしりを免れぬ代物ですが、なかには既に臨場感を失い、二度と書けそうにないという意味では、当人にも貴重な感想無きにしもあらず、編んでみてよかったですと思います。

一週間前、つれあいが口腔の癌の精査と手術のために入院しました。

七、八年前から不具合を訴え続けていたのですが、原因不明のまま推移して今日に至り、今春ようやく危惧していた通り、癌が正体を現して来たのです。

医院では事務長、家庭では主婦として私の不得手な方面の一切を仕切ってくれていたつれあいに、こうして急に撤退されてしまうと、日夜尽きることなく生起、山積する雑用に途方に暮れる想いがあります。しかし、考えてみれば、あれこれの面倒なことどもは、元来「雑用」などではなくて、まさにそれが生活そのものでありました。三十年余も「雑用」に耐えて、共同生活を支えてくれたつれあいに、満腔の謝意をこめてこの一冊を捧げます。

老後の入り口で難敵に遭遇したつれあいに、また幸運が巡ってきますように。

二〇〇四年六月二十九日

鎌倉常盤にて

あしがきの、あしがき

つれあいは十五時間を要した難手術にも耐え、四ヶ月にわたる入院のあと十月十七日に退院してきました。四箇所腫瘍部分を綺麗さっぱり郭清して貰いましたが、病的性質上これで全治と言いつれないのがつらいところです。でも、とりあえずは生還できたしあわせを本人も家族全員ともども、しみじみと感じています。以上、現況を記して記念とします。

二〇〇四年十月末日

鎌倉常盤にて